

地域への関心や意識を高める

15 伝統的建物に触れる機会を通じて世代を問わずに地域に導く

■くらづくり応援隊ワークショップ

情報化社会や省力化を目指した技術開発で利便性や経済性を追求するばかりに、地域の伝統や文化が忘れ去られつつある。そのような中で、伝統的建造物は、職人らの知恵や経験に基づく巧みな技術によって築かれてきたが、そこで用いられる材料に特殊なものはなく、ほとんどが地域でとれる木や土、竹といった自然材料である。したがって、伝統的建造物を補修する工程では誰でもが手伝うことができる作業があるはずである。そのような作業を手伝う協働活動を通じて、伝統的建造物や町並みを地域の資産として維持するための手間を共有することにより、歴史的景観だけでなく、その地域での暮らしや命をみんなで守っていこうという意識の萌芽に繋がると考える。さらに、子供の頃から伝統的建造物を題材に地域活動に参画する機会を用意し、その自らが携わった思い入れのある建物が永続的に残されることは、地域への愛着を生み、その気持ちがちまちを守ろうとする意識や地域に定着しようという思いに繋がることが期待できる。そこで、地域の老若男女が、まちの魅力や古い建物の中身とそれを守ることの大切さや大変さを理解し、地域への愛着を高めてもらうことを目的に、栃木市嘉右衛門町地区や桜川市真壁地区の修理現場において、「くらづくり応援隊ワークショップ」を継続的に開催している。実施にあたり事前に施工管理業者や左官職人らと当日の段取りや安全対策、保険等の入念な打ち合わせを実施し、当日使用する竹や壁土の準備等を建築系の高専生や大学生が地域の伝統構法を学びながら手伝っている。

写真1は小学生の親子を対象に嘉右衛門町地区の修理現場で実施した様子である。小山高専と、とちぎ蔵の街職人塾、栃木の例幣使街道を考える会が企画し開催したこのワークショップでは、近隣の小学校に通う親子に参加を呼びかけたところ、総勢49名(子供19名、保護者19名、その他の好奇心旺盛なおトナ11名)が参加する賑やかな企画となった。子供たちが壁に泥団子をぶつけていると、徐々に保護者も夢中になり、近所に住いのおトナたちも集まって子供たちに塗り方を伝授するなど、子供の活動を通じて地域の協働活動が熱心になる様子が見られた。

写真2はとちぎ協働まつりの様子である。小山高専と、とちぎ蔵の街職人塾、栃木県瓦業組合青年部が協力して嘉右衛門町重伝建地区PRブースを設営した。そこでは、実物大の土蔵造の壁を立て、土壁の土塗体験や瓦葺きの実演・体験等を行い、ものづくりを通じて地域の伝統と文化に関心を高める取り組みを行った。

建物の守り手である職人と子供たちとの接点が少なくなった近年において、このような活動は地域で活動する様々な人々の姿を学ぶキャリア教育にも役立っている。また一方で、このような活動は職人の方々が存在意義を自覚し、誇りを高める機会にもなっている。さらに、子供たちだけでなく、同伴した保護者にも町の魅力や古い建物の中身、それを守ることの大切さと大変さが理解してもらえる良い機会になっている。参加したある保護者からは、ワークショップに参加してから、その後の建物が気になり子供と共に前を通る機会が多くなったという話を聞くことができ、期待した効果が見られつつある。



写真1 嘉右衛門町地区でのくらづくり応援隊ワークショップの様子

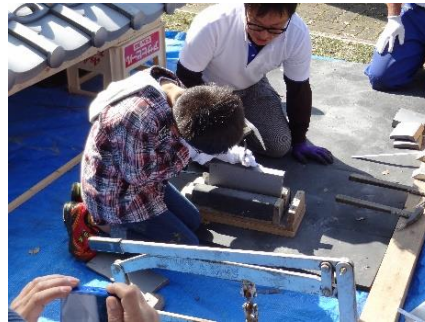


写真2 とちぎ協働まつりでの様子

■空き家活用のための再生活動

地域住民の高齢化により、歴史的建造物が空き家となる例が増えている。主屋には住んでいるが店舗は使っていない、介護のため施設に入所または親族と同居した、代替わりしたが遠方に住んでいるなどの理由から、維持管理に手がまわらず放置され、建物が傷んでいく例が多い。空き家であっても、家財が残されている、年に数回は帰省するなどの理由から、賃貸には出せない事情も様々である。こうした空き家を市民団体等がイベント等で一時的に借用し、活用を図れる仕組みを構築することは、空き家の維持管理に寄与すると同時に、新たなかたちの地域コミュニティを育むことにつながる。また、空き家を活用するためには掃除・片づけ等(再生活動)に時間と人手を要するため、これを参加型のイベントとして実施し、参加者との交流を図ることで活動のサポーターを増やす取組みを栃木市のマチナカプロジェクトは進めている(写真3)。この空き家の一時的な活用を支援する取組みは、2011年から再生活動の参加者を募り開始した。これまでに数棟の建物が再生活用され、不定期ではあるがイベントや会合で活用されている。



写真3 マチナカプロジェクトによる空き家再生活動